大正12年1月、東西定期航空会による東京-大阪間の第3回運航時の写真。後が信鑑で手前は信鑑の恩師・杉本信三（(財)日本航空協会提供）

成田歴史玉手箱
●71回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

空飛ぶ高岡藩主の子孫　井上正鑑（後編）

初の国際定期便1番機に搭乗

伊藤飛行機研究所助教官時代、初めて受け持った第1期生との記念写真。前列右端が信鑑（(財)日本航空協会提供）

伊藤飛行機研究所で操縦技術を学びパイロットの道を歩みだした南部信鑑（後の井上正鑑）の夢は、国際線のパイロットになることでした。研究所に助教官として残り、後輩の指導をしながら飛行訓練に励んでいたころ、国内では日本航空輸送研究所、東西定期航空会、川西・日本航空会社の民間航空3社が発足、大正11年11月には、堺－徳島間で初の定期航空路が開設されるなど航空業界は新たな時代を迎えていました。そうした中、信鑑が川西・日本航空会社へ入社したのは大正15年2月のことでした。

川西・日本航空会社では国際定期航空路の開設を目指し、大阪－大連（中国）間の試験的定期航空6往復が許可されると、同年9月13日に川西式飛行機2機で飛行を実施し、初の国際定期便として成功を収めました。このとき1番機に搭乗したのが信鑑でした。彼はその後、国際線機長資格となる一等飛行操縦士の資格も取り、とても充実した日々を過ごしました。

昭和の時代になると、民間航空は国策の新会社である日本航空輸送（株）に統合され、井上家に婿入りした正鑑は昭和4年3月に新会社に入社。当時「華族出身の定期航空パイロット第1号誕生」などと新聞・雑誌に書きたてられたと後に正鑑は回想しています。しかし、彼を待っていた仕事は飛行機の安全管理・飛行指示などを行う運航係でした。パイロットを切望していた彼にとってはかなりのショックであったに違いありません。華族の嫡子となった以上、飛行を続けることは許されなかったのでしょう。その後、正鑑は大日本航空（株）が発足すると本社運航庶務課長になり、太平洋戦争中は終戦まで立川陸軍航空基地で飛行機を前線に空輸する業務に携わりました。

正鑑と交流のあった元下総歴史民俗資料館長の礒辺大暢さんは「正鑑さんは終戦とともに飛行機人生を終え、戦後はカメラマンとして生計を立て、平成5年6月7日に95歳で他界されました。いつお会いしても温厚で矍鑠とした姿がとても印象的でした」と感慨深げに、そして「日本の空の表玄関となった成田市に縁のあった正鑑氏が、日本の航空黎明期に活躍したパイロットの一人であるとともに、大空に賭けた先人たちの貴重な姿を写真で残した人でもあったことを知ってほしいですね」と語ってくれました。

大正15年9月、民間初の国際定期便1番機に乗った信鑑（右端）（下総歴史民俗資料館所蔵）

編集後記

4月22日に行われた市議会議員選挙の立候補者数は46人。40人以上となったのは、1967（昭和42）年の45人以来のことです。ところで、経費削減などから全国的に開票時間の短縮が叫ばれています。成田市も先進事例の研究などにより、開票作業を毎回改善してきました。今回の確定時刻は翌23日の午前0時25分、4年前は午前0時50分。開始時刻が市域の拡大により15分繰り下がっているので、実時間は40分の短縮。候補者数の多さも勘案すると、大幅な短縮と見てもいいのではないでしょうか。しかしながら、肝心なのは公正で正確な開票作業。むやみな時間短縮競争でないことはいうまでもありません。

市の人口

3月末日現在（　）内は前月比

総人口	122,231人	(- 28)
男	61,696人	(-122)
女	60,535人	(+ 94)
総世帯	50,529戸	(+187)

5月1日号掲載の市の人口に誤りがありました。お詫びして訂正します。

広報なりたは再生紙（古紙配合率100%、白色度81.5%）を使用しています。